## 第 23 回（平成４年）

みなかた　　ふみえ

# 南方　文枝 氏

生年月日　明治 44 年 10 月 13 日生

住　　所　田辺市中屋敷町

明治 44 年（1911 年）10 月 13 日、西牟婁郡田辺町（現田辺市中屋敷町）において、博物学者で民俗学者の南方熊楠、まつゑ夫妻の長女として生まれる。

昭和４年（1929 年）３月、田辺高等女学校専攻科卒業後は自宅にいて、付けペンの細かい英字で盛んに書き込みをしていた父熊楠翁の姿に触れる機会が多くなり、氏が 23 歳の頃、視力の衰えた父の菌類研究を手伝うようになった。キノコをルーペで見て写生、彩色をするものであったが、なかなか出来映えを承知してくれず、200 回以上の猛練習を重ねて、やっと納得してもらえたことなど苦労は多かった。

熊楠翁が名付けた「日本菌譜」のキノコの彩色図譜は４～５千枚に及んだが、顕微鏡で見た粘菌のような小さなものにも命があるということや短時間のうちに変形するおもしろさなど、熊楠翁から絶えず教えられていく中で南方熊楠翁の偉大な業績、研究の重大さなどを肌で感じるようになった。

昭和 16 年（1941 年）12 月、熊楠翁没後は母とともに残された標本類や蔵書等を損なわず、散逸せず保存に当たった。

終戦直前、戦争がいよいよ激化する中、父の遺言どおり「長持」一杯の粘菌やロンドン抜書など重要書物とともに、中辺路町（旧二川村の真砂氏宅）へ疎開、戦火を逃れ、事なきを得た。

昭和 22 年（1947 年）２月、京都大学出身で後に日本大学名誉教授となった岡本清造氏と結婚、居を東京に移すが、暇を見つけては帰郷し、粘菌の風通しや防虫剤の入替えなど保存に尽くした。

昭和 52 年（1977 年）、南方家を継ぐため旧姓に復し、保存への思い入れはますます強固なものとなった。南方熊楠翁の足跡、業績を考える上で最も貴重な資料は熊楠邸及び数千冊ともいわれる蔵書並びに粘菌標本類であり、それらを毎日の細心な注意と学問に対する畏敬をもって、可能な限りの努力で保存し、熊楠研究にゆるぎない基盤を確立した功績は誠に大きなものがある。

また、熊楠ブームが高まるにつれ、東京・大阪・広島等で「超人・南方熊楠展」が開催され、入場者総数約９万５千人と大成功を収めたが、数多くの重要な遺品

類の整理など、氏の昼夜を惜しまぬ尽力に負うところが大きく、今日の顕彰活動にも多大な貢献をしている。

著書には『父・南方熊楠を語る』があり、親族ならではのきめ細かい観察が熊楠翁の研究に貴重な資料となっている。

（略　歴）

| | |
|---|---|
| 昭和 4 年（1929 年）3 月 | 田辺高等女学校専攻科卒業 |
| 昭和 9 年（1934 年）頃 | 父熊楠翁の研究を手伝うようになる |
| 昭和 16 年（1941 年）12 月 | 父熊楠翁没後、学術資料の保存に全精力を傾ける |

（著　書）

『父・南方熊楠を語る』